

双葉町70年の軌跡

未来を拓く

2022



双葉町の歩み

双葉町は昭和26年4月1日に旧新山町と旧長塚村が合併し、標葉町として誕生した後、昭和31年4月1日に双葉町と改称した。

福島県浜通り地方のほぼ中央、双葉郡の北東部に位置し、東に太平洋を望み、西には緑豊かな阿武隈山系が連なり、海と山に抱かれた自然豊かな町である。国指定文化財である古墳時代末期の「清戸廻横穴」や200年以上の伝統を持つ「双葉町ダルマ市」など古い歴史や文化を誇っているが、平成23年3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故により町は一変した。全ての町民が町外へ避難し、長期にわたる避難生活を強いられることになった。

その後、町は復興へ向かって少しずつ歩みを進めている。令和2年3月4日に避難指示解除準備区域等の避難指示が解除され、同月、常磐自動車道常磐双葉インターチェンジが開通し、またJR常磐線が約9年ぶりに全線で運転を再開した。令和4年1月、町民の準備宿泊が始まり、8月27日に双葉町役場新庁舎が駅東側に開庁し、9月5日から業務を開始した。8月30日には特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、11年ぶりに町内での生活が可能となった。

合併から70年が経過し、双葉町は新たな一歩を踏み出した。



双葉町役場新庁舎外観

未来を拓く

双葉町70年の軌跡
2022

町民憲章 (昭和56年3月11日制定)

わたくしたちは、古い歴史と、文教の地としての誇り高いまちに育まれてきた町民です。ここに手を取りあい、より豊かな住みよいまちを築くために、この町民憲章を定めます。

- 1 自然を愛し、美しく清潔なまちをつくりましょう。
- 1 先人を敬い、笑顔といたわりで心のふれあいまちをつくりましょう。
- 1 古きをたずね、伝統と未来をみつめて躍進するまちをつくりましょう。
- 1 創造性を豊かにして、個性ある薫り高い文化のまちをつくりましょう。
- 1 元気で働き、若さのみなざる楽しく明るいまちをつくりましょう。

町章 (昭和47年10月1日制定)



双葉町の「双」を図案化、全体の大きな円は町の融和、団結を表現し、左右の小円は新山、長塚二つの地区と二枚の葉を表し、円の先端が左右に突き出ているのは、町の発展を示したものである。

町の花、木、鳥 (昭和61年10月1日制定)



町の花
さくら



町の鳥
きじ



町の木
せんだん





発刊にあたって



双葉町長
伊澤史朗

双葉町は、昭和26年4月1日、モデル合併町村第1号として、旧新山町と旧長塚村が県下に先駆けて合併し、新しい町政を施行してから70年余りが経過しました。

温暖な気候で、海と山に抱かれた自然豊かな双葉町は、先人たちの英知と努力によって、歴史と伝統を重んじながら教育・文化に力を注ぎ「文教の町」として名高い町となる一方、原子力発電所の着工以来は、我が国有数の電源供給基地として重要な役割を果たすとともに、飛躍的に発展してまいりました。

しかし、合併から60年目にあたる平成23年3月11日に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により全町避難という未曾有の大災害が町を襲いました。先の見えない状況の中、先人たちが積み重ねてきた歴史と町民の皆さまのふるさとに対する思いを考えた時、何としても双葉町をなくしてはならないと強い信念をもち、町の復興にまい進してまいりました。

震災から11年5カ月が過ぎた令和4年8月30日に特定復興再生拠点区域の避難指示解除が行われ、町内で生活ができるようになりました。さらに、JR双葉駅東側に建設した役場新庁舎での業務を開始し、駅西住宅への居住が始まるという大きな節目となりました。11月5日には町産業交流センターにおいて合併70周年記念式典を挙行し、これまで双葉町が歩んできた70年の歴史を振り返りながら、双葉町の復旧・復興のためにいただいた多くの皆さまからの多大なるご支援、ご協力に対し感謝と御礼を申し上げます。

このたび、双葉町の誕生から合併70周年記念式典までの記録をまとめた記念誌「未来を拓く 双葉町70年の軌跡」を発刊する運びとなりました。

本記念誌では、先人たちが築き上げてきた70年の歴史を10年ごとに振り返るとともに、震災前の双葉町の魅力に触れ、震災によって時が止まり、再び復興に向かって、時を刻み始めた町の歩みを時系列でまとめております。

双葉町の復興は、町への帰還という新たなステージへと移行しましたが、避難の長期化と社会情勢の変化により、課題は複雑・多岐にわたっております。課題解決には、困難を極めるとは思いますが、必ずやこの逆境を乗り越え、これまで先人たちが築き上げてきた双葉町の歴史の重みを次世代へと継承し、令和4年6月に策定した復興まちづくり計画(第三次)を施策の柱として、町の復興・再生の歩みを一層加速させ、未来へ向かって歴史のバトンをつないでいきたいと考えております。

令和5年3月



あいさつ



双葉町議会議長
伊藤哲雄

70年の道程は長く、この間の関係各位のご努力に深甚なる敬意を表する次第であります。

顧みますと、昭和から平成、そして令和へと続く、波乱・激動の中を、時には洋々たる前途に心を躍らせ、時には塗炭の苦しみを味わいながら、本町は常に、弛むことなく着実に前進発展を続けてまいりました。先人の残された足跡の大きさを、今ここに改めて感じております。

平成23年3月、本町は、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故という前例のない大災害に見舞われ、全町避難を余儀なくされました。避難は長期にわたり、長い年月をかけて築いてきた町民の暮らしが一変してしまいました。これまで先人が築き上げてきたものが、失われてしまったことの大きさは計りしれないものがありますが、本町はいま、この大災害を乗り越えようと必死に復旧・復興の取り組みを進めており、先般の特定復興再生拠点区域の避難指示の解除により、住民の帰還や居住再開がなされるなど、復興・ふるさと再生に向け一步一步着実に前進していると感じております。

しかし、全町避難から帰還へと大きく動き出した本町の復興まちづくりには、解決しなければならない課題が山積している状況であります。また、目まぐるしく変化する経済、社会情勢も厳しい状況が続いております。そのような中でも、さまざまな問題に対して、前向きに一つ一つ解決するとともに、一層の創意工夫を凝らして努力していかなければなりません。

合併70周年という節目を迎えたことを契機に、幾多の試練を経て築かれてきた先人の偉業に思いを馳せ、復興・ふるさと再生への新たな決意をもって、私たちに課せられた命題である新しい双葉町を創造することにまい進するとともに、過去と未来をつなぐ今を生きながら、忘れられようもない大災害の経験と甚だ痛む思いを胸に、これを教訓として後世に伝え、そして世代から世代へ先人の意思を引き継いでまいる所存であります。



祝辞



福島県知事

内堀雅雄

双葉町合併70周年記念誌が発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

双葉町は、昭和26年4月にモデル合併町村第1号として、旧新山町と旧長塚村が合併し、標葉町として誕生した後、双葉町に町名を改称され、町民の皆さまの生活環境の充実を図りながら、町の発展に務めてこられました。

しかし、平成23年3月を境に全町避難を余儀なくされ、役場機能を町外へ移すとともに、町民の皆さまも全国に離散するなど、本当に御苦労の連続であったことと思います。

そのような中、令和2年3月には、町の一部において避難指示が解除され、復興の先駆けとなる「働く拠点」として、中野地区復興産業拠点や双葉町産業交流センターが整備されました。産業拠点においては、20社を超える企業との立地協定が締結され、そのうち半数以上が操業を開始しております。

さらに、令和4年8月には、特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、双葉町の復興は、新たなステージに向けた大きな一歩を踏み出しております。これもひとえに、伊澤町長を始め、議会、職員、町民の皆さまが力を合わせ、「何としても町を残そう」という強い思いを胸に、古里の復興・再生に努めてこられた結果であり、これまでの大変な御苦労、御努力に深く敬意を表します。

そして、令和5年1月には、約300年前から続く伝統の「双葉町ダルマ市」が12年振りに町内で開催され、多くの方々にぎわいました。全町避難により存続が危ぶまれていた伝統行事は、町民の皆さまの古里を思う心に支えられ、避難先の一つであるいわき市で大切に受け継がれながら、再び町内に戻ってくることができました。逆境を乗り越え、町内での開催を実現させた町民の皆さまの熱意に深く感銘を受けるとともに、これからも未来を切り拓き、新たな町の歴史を築いていかれることを御期待申し上げます。

県といたしましては、双葉町の復興を更に加速させ、帰還や移住に向けた力強い後押しとなるよう、住まいや働く場の確保、医療・教育環境の整備など、住民の皆さまが安心して暮らせる環境づくりにしっかりと取り組んでまいります。

結びに、双葉町における復興の更なる進展と、町民の皆さまの御健勝、御活躍を心からお祈り申し上げます。



祝辞

京都府京丹波町長

畠中源一

この度は、双葉町合併70周年、誠にありがとうございます。京丹波町民を代表し、心よりお祝い申し上げます。

双葉町と京丹波町のつながりは、旧瑞穂町と平成6年に締結した姉妹町提携から始まり、平成18年に双葉町と京丹波町が友好町提携の盟約締結を行い、今日に至っています。

双葉町では、東日本大震災により、いまだかつてない困難に直面しながらも、まちの復興に向けて懸命に歩んでこられました。その間、双葉町民の皆さまとの物心両面にわたる交流を実施させていただき、絆を深めてまいりました。

この友好関係を次の世代につなげ、双葉町と京丹波町の絆がさらに深まることを願うとともに、双葉町の復旧・復興はもとより、ますますのご発展と、双葉町民の皆さまのご多幸を心から祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



祝辞

埼玉県加須市長

角田守良

双葉町が合併70周年を迎えられましたことに対し、加須市及び加須市民を代表いたしまして、心からお喜び申し上げます。これもひとえに、町民の皆さまがふるさとの発展に向けて、たゆまぬ努力を重ねてこられた賜物と深く敬意を表します。

双葉町におかれては、伊澤史朗町長のリーダーシップの下、町民の皆さまと一体となって、大災害からの町民一人一人の復興と町の復興を推進してこられました。

加須市では、旧騎西高校に避難所が設置されてから、平成26年3月の閉鎖まで避難生活に対する支援を行い、閉鎖後も避難者への戸別訪問などの避難者支援を通じて、双葉町の方々と加須市民との交流が生まれました。

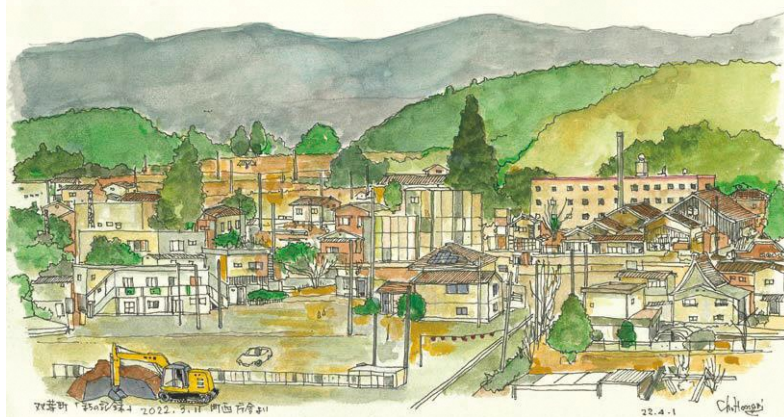
こうした様々な分野で友好が深まったことにより、平成28年11月3日には、加須市と双葉町は友好都市として新たな強い絆で結ばれ、復興に向けて歳月をともに歩んでまいりました。

今後も、双葉町が復興を果たし、避難された方がすべて帰還されるまで支援を継続してまいります。

結びに、この記念すべき合併70周年を契機に、双葉町が未来に向けてますます飛躍されますことを祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

未来を拓く

2022



双葉町の歩み

発刊にあたって
あいさつ

双葉町長 伊澤史朗
双葉町議会議長 伊藤哲雄

祝 辞

福島県知事 内堀雅雄
京都府京丹波町長 畠中源一
埼玉県加須市長 角田守良

序 章 ふるさと双葉 7

第1章 70年年表 23

合併から10年	1951.4 ▶ 1961.3	24
合併から20年	1961.4 ▶ 1971.3	28
合併から30年	1971.4 ▶ 1981.3	32
合併から40年	1981.4 ▶ 1991.3	38
合併から50年	1991.4 ▶ 2001.3	44
合併から60年	2001.4 ▶ 2011.3	50
合併から70年	2011.3 ▶ 2022.11	56

新庁舎開庁から合併70周年記念式典までの足跡 76

第2章 トピックス あの時の出来事を再現 85

姉妹町・友好町・友好都市との交流 86

国際交流 90 スポーツ 92

産業・観光 98 行政システムの変革 102

住民交流・生涯学習の拠点誕生 105

医療・福祉・児童・運動…各施設が完成 107

歴史・遺産 111

第3章 地区(行政区)紹介 震災前の17地区 113

資料編 125

協力・参考資料・あとがき